あいのその　2023年6月号

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された」
（ルカによる福音書　2章52節）

愛の園保育園　042-325-1045

まだイエス・キリストが12歳だったころの話です。イエスを連れて神殿参りからの帰路についていた父ヨセフと母マリアは、いつの間にかイエスがいなくなっていることに気づき、心配して捜し回りますがなかなか見つかりません。三日も経ってようやく見つかったイエスは、なんと神殿で学者たちと熱心に議論していました。それを見て、マリアはイエスを叱ります。ところがイエスは、私が神殿にいるのは当たり前です。そんなことも知らなかったんですか、と答えます。子どもが行方不明になったのですから、親が心配し、叱ったり諭したりするのは当然であり、そんな気持ちなどまるで意に介せずといったこのイエスの生意気とも言える言葉には、あまりにも「親の心、子知らず」と思わざるを得ません。しかし聖書は「親の心、子知らず」ではなく、むしろ「子の心、親知らず」という視点でこの出来事を語るのです。

十数年後、イエスは母の目の前で処刑されてしまいます。子どもが親よりも先に死んでしまう。それも、もっとも残酷な方法によって。なぜこんなことになってしまったのか。なぜ親を悲しませるようなことをするのか。そんなマリアの悲痛な叫びがそこにはあったでしょう。マリアからすれば、これもまた「親の心、子知らず」の心境です。しかしこれは、そのことでしか、すべての人に対する神の愛と赦しを伝えることができないのだという神の思いの表れだったのです。

人間は勝手なもので、自分の親に対しては、「子の心、親知らず」との視点でものを言ったり思ったりするところが多々あっても、自分が親という立場になれば、ついつい「親の心、子知らず」の視点だけに立って子どもに接してしまいがちになるかもしれません。だからこそ、そんな生意気で自分勝手な私たちを、神さまは自らの子として、いつも見守り続け、愛し続け、育て続けてくださるのです。心も体も成長していくということ、それは、子どもに限ったことではなく、私たち大人にこそ必要なことなのかもしれません。

（牧師　西脇　正之）